台湾通信　台湾の街角から①

# ー貢献者に対する特別な感情ー

台北事務所　寺山学

昨年４月，台南・烏山頭ダムにおいて八田與一技師の銅像の一部が破壊される事件が生じた。この心ない行為に対し，台湾の関係者による多大な努力の結果，銅像は直ちに修復され，５月８日に行われた八田技師没後７５年の慰霊祭は，日本と台湾の絆を再確認する場となった。

台湾の人々が八田技師に対して抱く特別な感情は，様々な事象から見て取ることができる。八田技師の銅像を戦後の国民党統治の中で大切に保管し続けた地元民，その功績を後世に残すため烏山頭ダム周辺道路を「八田路」と改名した台南市政府、馬英九政権下で開設された「八田與一記念公園」等々。こうした事象からは政治的立場を超えた，一人の日本人技師に対する台湾の人々の尊敬の念を感じ取ることができる。

異国の技師である八田技師に対し台湾人が抱く敬愛の気持ちは何に由来するのか。この点，烏山頭ダムが地元にもたらした功績に対し，義理に厚い台湾の人々が感謝の気持ちを継承し続けてきたことが指摘される[1]。ここでは，清朝時代の２つの事例を取り上げ，移民社会台湾における土地への貢献者に対する特別な感情について考察したい。

八田與一銅像

## 曹謹

清朝はかつて台湾を「化外の地」と称したとされるが，清朝による台湾統治は212年にも及ぶ。この間，「三年官，両年満（台湾に派遣される役人は３年の任期のうち，２年で満ちあふれるほどの財を手にする）」と称されるほど，中央から派遣された官吏の腐敗は深刻であった。それ故，台湾住民の官吏に対する不信感や対立感情は根強く，清朝時代を通じ１００件もの武力蜂起や騒擾事件が記録されている。「三年一小乱，五年一大乱（三年に一度の小反乱，五年に一度の大反乱）」

記念公園

1　八田與一技師については，『日本人，台湾を拓く』まどか出版 155 頁からに詳しい。

八田路

と言われる所以である[2]。

しかし，現在の台湾南部にあたる鳳山県で知県（※知事に相当）を務めた曹謹に対する台湾住民の感情は異なる。曹謹は，1837 年から 1841 年まで鳳山知県を務めたが，この間高雄地域の発展に力を入れ，地域の農業発展のため，水路建設に尽力した。1838 年に完成した同水路は旧凰山県全域に裨益する大がかりな水路で，翌年同水路は功労者曹謹に因んで「曹公圳」と名付けられ，現在まで地元に恩恵をもたらし続けている。

地元住民の曹謹に対する感謝の念は，水路を「曹公圳」と名付けたことにとどまらない。曹謹死後 11 年後の 1860 年には曹謹を奉る「曹公廟」が建てられ，曹謹は地元住民から「神」として崇められるようになる。それから既に 150 年もの歳月が経ったが、曹公廟は現在でも鳳山市の街の中心であり続けている。また，日本統治時代に建てられた小学校も戦後「曹公国民小学」に改称された。清朝の役人であった曹謹は世紀を超えて地元住民の崇拝を受け続けているのである[3]。

2　清朝の台湾経営については，伊藤潔『台湾史』第三章に詳しい。

3　曹謹及び「曹公圳」については、連横『台湾通史』五南図書他 列伝六及び高明士編『台湾史』114 頁に詳しい。

曹公圳

曹公廟

本題からは逸れるが，興味深いことに，曹公廟内に掲げられている扁額の一つは，台湾各地の河南同郷会から贈られたものである。清朝時代に中央から派遣された「河南人」曹謹は，戦後台湾に渡った河南省出身外省人の団結の象徴となっているのである。世紀を超えて繋がる台湾の移民社会のダイナミズムがそこにある。

## 「林先生」

次に取り上げたいのは，彰化県二水郷にある「林先生廟」である。この地は，「曹公圳」と並び清朝三大水利事業の一つとされる八保圳の水源の地である。八保圳は清朝時代に施世榜という人物

「林先生」廟

が約10年もの月日を費やし建設した水路であり，同水路の完成により不毛の地であった彰化平原一帯は一大穀倉地に変貌を遂げた。この水路建設の最大の貢献者とされる人物が「林先生」である。「林先生」は水路建設にあたり困難に直面した施世榜に重要な示唆を与えた老人であるとされるが，その人物の詳細は史料に残っていない。ただ，施世榜に対し自身の知見を伝授した後，名前も名乗らず林の方角に去って行ったとされることから[4]，後人によって「林先生」と名付けられた。その後，その貢献を称えるため地元民によって「林先生廟」が建てられ，現在に至るまで「林先生」は地元の「神様」として崇拝され続けている[5]。

廟内には李登輝総統（当時）が贈った「飲水思源」という扁額が掲げられている他，廟前の広場には日本統治時代に台中廳長であった加福豊次氏が「林先生」の功績を記念し建てた石碑が立っている。この石碑は戦後破壊に遭ったが，2011年

李登輝総統の扁額

に地元の農田水利会によって復元された。ここでは日本統治時代の日本人廳長が清朝時代の土地功労者を称え，戦後破壊されたその石碑を地元民が復元するという興味深い事象が起きている。その複雑な歴史から，台湾史における「日本」の存在とともに，「林先生」に対する時代や民族を超えた尊敬の念を感じずにはいられない。

清朝官吏，名もなき老人，日本人技師…。台湾の土地に功績があった者は，その身分や背景に関わらず客観的に評価し，その精神を後世に伝えていく。曹謹，「林先生」及び八田技師に対する台湾人のこうした態度は，移民社会が持つ寛容性や多元的価値観といった台湾の精神的な一面を映し出しているように思えてならない。

加福廳長の石碑

4 「林先生」の由来については，他に自身が「林先生」と称したとの説もある。行政院台湾農業故事館ＨＰ：http://theme.coa.gov.tw/storyboard.php?type=c&web=C&id=232 ）

5 八保圳及び「林先生」については，陳水源「八保圳開築工程大功業」や駱芬美『被誤解的台湾史（誤解された台湾史）』時報出版 2016年12章に詳しい。